

未黒野 平成二十五年一月五日発行 第六十八巻第一号（通巻七九七号）

未黒野

すぐるの

1月号
(通巻797号)

いろはもみぢ

小川玉泉

秋麗の富士欄干の汐湿り
釣り舟の艫は舟底に鯨日和
稲架低く結ひ了へ憩ふ老農夫
杖を止めしばらく見入る十三夜

新藁を又銃の形に峡の小田
秋日濃き広場丸太の集積所
差し交はす池畔の松と照紅葉
池に映えいろはもみぢの真紅
天を指す葉先を残し松手入れ
紅競ひ枝振り低き林檎園
走り根に溜まり銀杏の散り止まず
香煙に身を拭ひ秋惜しみけり

楷大樹

松本三千夫

安曇野の瀬音清らや草の花
分けて水飲むやがれ場の秋高き
雪溪を遠見紅葉の枝越しに
ケルンに手置くや秋冷俄かなる

塩の道博物館

箱梯子掛けたる帳場冷やかに
そぞろ寒塩蔵にあるにがり溜
文庫蔵の朱塗長持秋気満つ
木犀や切り貼りのある花頭窓
鶏頭や寺に干されて白き物
金堂の天蓋の金冷やかや
秋高し五輪塔背に楷大樹

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

茸

田中臥石

酒注ぐ秋の彼岸の墓へかな
納豆を解く朝寒の厨妻
いもうとを訪ふ秋冷の遠江
綱を曳く神輿も小さき秋祭
県境の河を亘と鷓飛ぶ
鷓群るる空や上総の山低し
古墳訪ふ上総丘陵花すすき
茸採る妻や海透く松林
満面に笑みうかべたる茸飯
秋の海渚に深き馬蹄跡

秋澄む

大橋伊佐子

約束の如くに咲けり彼岸花
酔芙蓉夕べの色に風立ちぬ
秋澄む銀閣寺や松の影置く銀沙灘
一つ灯となりて夜長の灯なりけり
春夫の詩口ずさみつつ秋刀魚焼く
多感の目清し少年林檎噛む
大落暉花野を覆ひ尽しけり
島裏の崖の荒びや海桐の実
風の棕櫚夜寒の音を鳴らしけり
競ひ鳴く虫の音闇を深くせり



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

草紅葉 小倉正穂

はらからも遂に我のみ木の実独楽
躑くや萩にこころを奪はれて
手すさびの何時か秋思の砂時計
かまつかや又も本家が分家ごと
風あつめ捨て田の畦の彼岸花
草紅葉山の小径のふくよかに
核家族よそに簾の小菊かな

鰯 雲 加藤静江

轟きて一度きりなる秋の雷
鰯雲昼の灯台深ねむり
頂や足許に湧く秋あかね
水神の傍に句碑や鴟日和
秋霖や鎮痛剤の増ゆる夫
鼻梁高くなりたる夫や夜の長し
活よかり近海ものの秋の鰻



秋入日 菅野日出子

噛み合はぬ孫との会話梨を剥く
ほろ酔ひの句談議に花菊膾
一輪車の子等の散りぢり秋の暮
河川敷に球追ふ子等や鱗雲
雲一つなき海坂や秋入日
夕日すく河口果てまで蘆の花
クラスの名標すたんぼや稲穂波

桐一葉 城戸 緑

桐一葉罅の走りし百度石
秋澄みて牛点景の牧場かな
砂浜に残る落書や暮の秋
露けしや試歩の靴紐しめ直す
小鳥来る見晴台の方位盤
晩秋の風竹林に遊びをり
台風裡はやも点れる常夜灯

紫苑 菅野蒔子

茄子トマト挽ぎてなぐさみ畑終ふ
蜻蛉たつを待ち渾身のティッシュ
天声人語写すペンとる夜長かな
熟すまで少し間のある柿の色
あと一と目あと一段と毛糸編む
紫苑採る母の齢の倍を生き
草もみぢ八十路を越えて何処まで

草の花 熊切光子

常になく荒ぶる櫛望の月
草かげに息ととのへて秋の蝶
上げ潮の川面の釣瓶落しかな
いただきの天日淡し草の花
芦原の葉擦れ止まざる水の闇
校庭の喊声柿の色深み
木ささげに夕日したたり美術館

青炎集

横浜 外山節子

新米の焦げ等分に頒ちけり
あれその通ずる二人衣被
望郷の果てに買ひたる山の芋
清張の推理に嵌る夜長かな
鳥渡る子の綾取りの川の上
炭鉱のありたる町や銀河濃し

横浜 戸田澄子

曼珠沙華気になる齡となりけり
穂すすきに日がな雨降る蛇笏の忌
穂すすきや余生は風の吹くままに
濡れ縁は夫の手作り小鳥来る
赤とんぼ止まりし指に余韻かな
秋寂ぶや看とりの日々の懐しく

小川玉泉選

横浜 熊切修

鮮しき土押し上げて思ひ草
十六夜や青白き雲とき放ち
みたび見る郵便受けや鰯雲
積みし書をまた仕舞ひこむ秋思かな
岩を噛む水の勢ひや初紅葉
鶴鴿の忽とあらはれ刈田道

横浜 和田慈子

潮の香の俄や野分過ぎてより
新涼や船より望む港の灯
雲の影映す小流れ秋澄めり
夕風や野に点晴の烏瓜
山蔭の草むす駅舎ばつた跳ぶ
ひとりには一人の小蔭秋日傘



横浜 今泉あさ子

昇降機下る初秋の愛宕山
秋暑なほ撒餌に群るる池の鯉
狛犬の声を聞くかに宮の蝶
街筋の寺門に入るや秋の蝶
声高の祝ひ帰りや敬老日
名を変へて広き川幅鳥渡る

横浜 河合とき

飛驒川の逆巻く波や九月尽
銀杏を拾ひ思ひ出ひろごりぬ
朝刊を取るや真白き酔芙蓉
住み古ればこも故郷むかご飯
山牛蒡の実の笹色や日矢のなか
秋うらら日の斑の跳る石畳

横浜 橋場美篤

さはさはとさはさはさはと竹の春
漣に初鴨奔り影はしり

流鏝馬の的射る音や秋高し
蓮の実の飛べる日和の静寂かな
一枚の棚田にばかり稲雀
古代米穂のむらさきの匂ひ立つ

横浜 中野久雄

さやけしや朝日の透くる山毛櫨の森
潮騒の昂ぶる闇や月の海
すれちがふ人の残り香月の道
とつおいつ作りし巢箱小鳥来る
三更の雲走らせて今日の月
はんなりと雲鴝色に秋の暮

横浜 小田嶋野笛

九月尽戦ひ終へしごとく臥す
猫じやらし長寿の盾の恙夫
銀鱗の光淋しき穴まどひ
ジャズが好き志ん朝が好き衣被
一坪に足らぬ風呂場や虫の声
秋風や男の知らぬ身八ツ口

横浜 青木由芙

たゆたひて雨粒落とす萩の花
土牢の静寂破りぬ鴟高音
層塔にかかりて淡き明けの月
岸離るる渡し舟追ひ鬼やんま
山暮れて法衣の裾のみのこづち
月を背に少年駆くる渚かな

耕 土 集

松本三千夫選



宮地 静雄

コスモスや住み古る家を彩れる
川底の石の白さや秋澄めり
バスを待つ間の釣瓶落しかな
せせらぎの弛まぬ音の秋思かな
穂~~や~~やひと駆~~続~~く基地の塀

相原 内田 梢

掃くことを暫し停めて枝垂萩
糞虫の糸を信じて吹かれをり
これからのことはさておき金木犀
風鐸の寂れて桜紅葉かな
石榴の実裂けて絆の顕なり

新宿 浅岡 麻實

十勝野を掠めて秋の時雨かな
牛群る開拓の村秋時雨
草ロール積み上げ牧の天高し
唐松の黄葉のつくる村境
庭先の胡麻すす筵古庇

横 齊藤マキ子

二ツ目の寿限無愉しや敬老日
篝火に残る舞台や中時雨
産屋や老舗に走り栗おこは
コスモスを分けて郵便配達夫
朝市の虚抜き大根ます買ひぬ

横浜 横路 尚子

長腕の起重機の釣るいわし雲
秋空へ大砲向けて三等艦
敬老日ルンバリズムのはづみけり
騎馬戦の今は女や体育祭
天高し三等艦旗のはばたきぬ

小野 弘正

煽らるる糞裏の白や葛の雨
墓石に刻む円の字秋あかね
夕暮の風の道すじ曼珠沙華
被災地の夜長や果てぬクラス会
秋の夜の間はず語りや旅の宿